



H.C.C. ■ ■ □ (ごあいさつと講演の課題)

滋賀からきました、阿部安成と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

当初は講演の副題を「成果と課題」としましたが、これを「課題と可能性」にあらためました。これまでにあげてきた成果はあります。ただそれがあると声高に披露するよりも、いまわたしたちの課題がなにか、その所在を明示するために、副題に「成果」の語を用いませんでした。

わたしの講演の目的を、最初にはっきりと示しましょう。それはまず、高商史研究の活性化にあります。そして、そのための条件や環境の整備を促進することも希願しています。

¹ 本稿は、2014年7月12日に開催された長崎大学経済学部講演会「戦前期文献」と旧制高等商業学校における講演原稿の加筆修正版である。講演会においては、長崎大学経済学部学部長岡田裕正教授、同学部柴多一雄教授、同学部東南アジア研究所江頭紀代美さんにお世話になった(多謝。ありがとうございました)。本稿はまた、2014年度科学研究費補助金基盤研究(C)「20世紀前期の帝国日本における実学実践と教養主義をめぐる文化研究」(課題番号24520746)による成果の1つである。なお本稿では高等商業学校を高商、帝国大学を帝大と略記する。

H.C.C.

これらは、ひとりの研究者や1つの共同研究の課題にとどまりません。むしろ、高商を母体とする学部や大学、その卒業生、それがあつる地域——これらの課題であると示すことが、この講演の目指すところだす。

ところで余談を1つ——高商にはいくつかの共通項があります。その1つが、講堂だす。旧帝大系の大学や、東京高商、東京商科大学を母体とする一橋大学では、重厚な煉瓦など石造りの講堂があります。それらにくらべると、高商の講堂は、おおよそどの学校も似たようなようすがあつる木造で、こじんまりとしたやわらかさをあつらわしていたようにおもいます。ただそうした高商の講堂は、移転による解体や焼失などによつていまでは、彦根高商の講堂ただ1つだけが残つています。滋賀大学経済学部のある彦根キャンパスには、この講堂（1924年竣工）と、彦根高商から滋賀大学経済学部にまでつながる同窓会組織の陵水会館（1938年竣工）との2つの登録有形文化財があります。これがちょっとしたお国自慢だす。とのべたところで、急いでご当地よいしょをもうしますと、この長崎大学経済学部の片淵キャンパスには、旧研究館の「瓊林会館」と煉瓦造りの「経済学部倉庫」と石造「拱橋」の3つの登録有形文化財があります。彦根よりも1つ多く、また、キャンパス内に3つの登録有形文化財があつる旧高商系学部は、ここ長崎だけだすでしょう。

H.C.C. ■ □ ■ （はじめに）

経 歴 ここで、わたしの自己紹介をいたします。わたしは、経済学部勤務してはいますが、学部でも大学院でも経済学、また高商にかかわる教育学の勉強はほとんどしませんでした。文学部史学科、ついで社会学研究科地域研究専攻で育つたわたしは、近代日本社会史の看板を掲げて調査と研究をしています。いつの、どこの、どのような歴史を調査研究しているのかが、この標識でわかるかとおもいます。もつとも、社会史という分野はどのようなことでもできるところがあり、一方でそれを方法として活用するときに意義があらわれるといえるかもしれませんが。その方法をごくかんたんにいうと、歴史を書くことと、その書き方の検討となります。これまた、もつとも、それではなんだかよくわからないか

H.C.C.

もしれず、ひとまず、これは、くせのあるやり方だとご理解いただければよいでしょう。

いま日本で、高商史研究をフルタイムでしている研究者は、おそらくひとりもないだろうとおもいます。わたしはパートタイマーとして高商史研究をおこなっています。わたしが初めて長崎大学を片淵の地にたずねたのは、2004年のことでした。それからちょうど10年、長崎高商などの高商史研究にたずさわってきたこととなります。この10年で、高商史についていろいろと書いてはきました。その一方で、高商史を総合したり、これまでの自分の議論をまとめあげたりするにはいたっていません。この中途半端なさまに忸怩とするところがあります。

観 点 つぎに、わたしの高商史研究の観点をのべます。それは、史料のようすが歴史叙述をかえる、とともに、研究の新展開が史料の状況をかえる、ということです。こうした観点のもとでわたしは、これまでに、高商史の元となり、それをささえる史料の目録をつくり、ささやかながら史料の公開に努め、そして、論文を書いてきました。調査をおこない、史料の所在と情報を発信し、そして研究の1つの帰結としての稿を発表する、という作業のくりかえしです。

課 題 こうした作業の成果をどのように想定するか——それはやはり、高商とはなにか？を明らかにすることでしょう。高商の機能や役割を、その時代と社会にうまく位置づけることが必要です。ただしわたしは、そうした考察とともに、高商史がこれまでどのように考えられてきた、これからどのように考えてゆくのか、という思索も重要だと考えています。それはいいかえると、高商をめぐる、それを可能にする、それを成り立たせている状況や条件を記録し、それを批評することでもあります。この後者はとりわけ、後世への贈りものになるでしょう。

H.C.C.□■ (高商史の歴史)

高商史の執筆者は？ 高商の歴史は、だれによって記されてきたのでしょうか。それは自前の事業として始まりました。高商の歴史は、まず、高商において記されてきたのです。

H.C.C.

たとえば、長崎高商のばあいは、1932年に同校の研究館によって『資料目録』が編集発行されました²。その3年後の1935年に、長崎高商では創立30周年を記念して『長崎高等商業学校三十年史』が発行されました。この長崎の事例のとおり、まず所蔵する図書などの目録をだし、ついで史誌を刊行する順序は、とても望ましい、あるべき進め方だと、わたしは評価します。

ただしこうした自前の高商史編纂は、どこの学校でも実施されたわけではありませんでした。たとえば、彦根高商では、それがあつた時代に高商史は編まれませんでした。またたとえば、小樽高商では、原稿が執筆されたものの刊行されることはなく、稿本として残っているのみです³。

高商が編纂した高商史には共通する特徴があります。それは、編年体で執筆されているということです。創立から順に年次をおって歴史を記す型です。これはいきおい、発展の校史となります。おうおうにしてそうした型の歴史記述には、失敗や未遂が削除されるという嫌いがあります。ただし、記されないことがらがあるという瑕疵がある恐れが想定できるとはいえ、高商によって編まれた史誌は重要な記録として活用することができます。

教育史のなかの高商史 では、高商がなくなりそれらを母体とする学部が1つの構成素となって国立大学が創立されて以降、高商史はどのように展開したのでしょうか。そこでは制度史が主流となりました⁴。個別に高商がかえりみられるときには、そこに在職した教官や校長の履歴や業績がとりあげられました。また、大学に昇格した旧制高商をめぐっては、やはりその発展史が記され、昇格がかなわなかったばあいでも、大学と同様の教官の陣容と研究と教育の成果が讃えられ、大学とはならなかったもののそのミニチュアぶりが披歴されたといつてよいでしょう。

他方でまた、1949年以降に大学史が編まれるなかでは、その元となった高商史は学部や

² 『資料目録(二)』が最初の目録と同じ編集発行者によって1937年に刊行されている。なお、長崎県立長崎図書館では2つの目録と創立30周年記念の史誌を所蔵している。

³ 高商による高商史については、後掲の文献目録に列挙した。

⁴ たとえば、天野郁夫の著書を参照。

大学の前史という扱いをうけるていどでもありました。そこには記述の量も少なくその内容も薄い高商史が記されました。

高商史料の整備 自前の学校史や、教育史における制度史として高商史が記されるなかで、高商の史料はどのように整備されてきたのでしょうか。その前史として高商史が記された大学史や学部が編集刊行されたそのあとで、高商の史料はずいぶんと、あるいはいくぶんか混乱しているようすがみられます。たとえば、滋賀大学では、新制大学創立からかぞえて 40 年、50 年を経たところで、それぞれのときに大学史を刊行しました⁵。しかしその後、大学史編纂にあたって使用した文書などがきちんと保管されず、いまそれらを史料として閲覧しようにもほとんどそれができない状況にあります。

そうした大学史史料の一部とおもわれる簿冊群が倉庫に放置されていることが、一部の教職員のあいだで知られていました。担当部署の事務方からすれば、それらは廃棄文書であって、この世にあるはずのないものでした。それを 1 冊ずつ手にとって目録をつくり、大学史関係史料として適切に永年保存へと手はずを整えていったのは、ひとりの教員の尽力があったからこそでした。もっともこうした整理は、事務方には苦々しくみえたようです。

わたしが高商の調査研究を始めた 2000 年代初頭には、高商史料というとき、高商の刊行物や文書の目録はあまり整えられていなくて、高商が収集した、高商の同時代となる、おもに 20 世紀前期のアジア地域の文献目録が知られていました。それが旧植民地関係史料です。この目録は、多くの高商を母体とする国立大学経済学系学部で編集発行されました⁶。高商が収集した図書などは、それぞれの高商の図書課や調査課や研究館などによって独自に分類され、当然のことそこに「旧植民地」といった分類項目はありませんでした。たとえば、彦根高商では「内地経済」「外地経済」との区分があり、後者において「台湾」「朝鮮」「満蒙」「支那」などの地域ごとの分類項目がありました。

⁵ [阿部ほか 2009] [阿部 2013 f] を参照。

⁶ [飯島 2001] を参照。

こうした高商収集図書を旧植民地関係史料として活用してゆく動向は、第二次世界大戦後の人文社会科学、とりわけ戦後歴史学といわれる潮流においてでした。アジア経済研究所が 1970 年代に旧植民地関係史料の所在調査をおこない、その成果が 1973 年から 1981 年にかけて『旧植民地関係機関刊行物総合目録』全 5 巻として刊行され、おそらくその編集刊行のための調査先となった旧高商系の国立大学経済学部系学部でも同様の目録が 1980 年代から 1990 年代中葉にかけて刊行されてゆきました。

アジア地域史研究者たちは、自分たちの研究に必要な史料を国内で探すなかで、おそらく、旧植民地関係史料をめぐって旧帝大系の大学とは異なる所蔵状況を旧高商系の学部に見ていったのでしょう。目録の編集刊行に顕著にあらわれる史料整備のようすと、当該史料にかかわる研究の活性化や進展の連動がうかがえる時代です。

旧高商系学部で旧植民地関係史料の冊子目録があいついで刊行されていったそのつぎの時期となる 2000 年代の初頭には、デジタル化の趨勢のなかで、冊子目録のデータベース化、史料画像データの WEB 公開が始まりました。こうした事業の嚆矢は、滋賀大学経済経営研究所ホームページにありました。公文書管理や大学が保有する図書や文書の保存と公開がほんのわずかながら注目をあつめ（かならずしも旧植民地関係史料に限定されない）、そのころ、小樽商科大学、一橋大学、滋賀大学での概算要求で、わたしたちがいうところの歴史資料の予算がつくという、これまでにない好機にめぐまれました。これによって一気に、史料のデジタル公開が進展しました。

ところが一方で、史料を所蔵機関に出向かなくても閲覧できるように環境が整備されたことと、アジア地域史研究者が現地の档案馆や大学や図書館などについて現地の言語で記された図書や文書を調査閲覧するようになるにつれ、旧高商系学部での旧植民地関係史料の閲覧数が減っていったように感じます。旧高商系学部が所蔵する旧植民地関係史料は、その多くが日本語で記されています。これまた研究の状況や環境が変わり、史料利用のようすもかわってゆきました。ただし、だからといって高商が収集した図書などが不要になったわけではありません。2000 年代中葉には、韓国の政府機関による大規模な史料撮影事

業が開始され、旧高商系学部の旧植民地関係史料もずいぶんと撮影されました。

H.C.C.◇■ ■ (高商史をめぐる変化)

環 境 2000年代中葉には、高商史をめぐるはっきりとした変化がありました。その背景や要因はというと1つには、国立大学の法人化が影響としたようにおもいます。毎年1回開催されていた、旧高商系の学部スタッフによる12大学連絡会(正式名称「12大学経済学部附属教育・研究施設実務担当者連絡会」)が、2005年に廃止となりました⁷。この連絡会では、滋賀大学経済経営研究所や山口大学経済学部東亜経済研究所などの事務スタッフがあつまり、それぞれのようにすを報告して情報の共有などをしていました。同会はまた年2回、『12大学ニュース』(1994年5月創刊)というタイトルの通信を発行していました。会廃止については、電子メールでの連絡で用事が足りるとの判断があったようですが、どこの学部の、どういう仕事をしているだれが、連絡会を活用してきたのかこなかったのかで、存廃の意見はわかれるところだとも思います。

わたしはこの連絡会には出席したことがないものの、ここにあつまる事務スタッフからは、それぞれの学部での調査にさいして、たくさんの教示を得ました。史料のようす、また史料をめぐる学内のようすは、それぞれの機関の事務スタッフがいちばんよく知っています。

スタッフに話を聞いたなかで、とりわけ印象に残っている史料をめぐるようすは、それぞれの学部で、なかなか所蔵史料に特化した業務がおこなえなくなっているということでした。ただもしかするとそれは、たとえば滋賀大学経済経営研究所の母体となった彦根高商の調査課や研究部でも似たような事態があったかもしれません。とはいえ、研究所などを名乗っていた部署が産学連携の拠点となったり、教育や研究の支援をおこなうよう業務転換したりするなかでは、史料などという古臭く、どれだけ利用されるかよくわからないといわれてしまう(また実際にそうしたようすもある)ものは、効率や成果の観点から見

⁷ 12大学連絡会については、滋賀大学経済経営研究所助手の江竜美子より教示を得た。

捨てられてしまう傾向にあったわけです。

この動向は学部や大学の過去をかえりみるようすにも顕著にあらわれています。1900 年代初頭に創立した高商を母体とする学部は、2000 年代初頭に創立 100 年をむかえたわけですが、百年史を編めなかった学部や大学があります。急ぎつけくわえれば、わたしはそうした記念誌を編むことが不可欠だとか、刊行したことがただよいことだとはまったくおもっていません。それぞれに事情もあるでしょうから、それぞれに判断をすればよいことです。ただ 100 年というかなり大きな節目のときに、それを記念する行事に史誌の編纂刊行が採用されなかったということを確認しておきたいだけです。

多くの旧高商系学部が、その創立からみずからの履歴をかえりみえています。このこと自体も、よくよく考えるべき素材ではあります。それはいまおくとして、たとえば横浜高商を母体とする横浜国立大学では、2008 年に『横浜国立大学社会科学系部局八十年史—経済学部・経営学部・国際社会科学研究所のあゆみ』を刊行しました。ただしそこでの高商の記述は、やはり前史にとどまっています。史誌で注目すべきは、『小樽商科大学百年史』です。これについてはすぐあとにまたのべます。1900 年代初頭に創立した高商は、2000 年代初頭に創立 100 年、創立 80 年などをむかえました。それらを記念する史誌を編集発行できたかどうかで、旧高商系学部が二極化したようすをとらえることができます。

小樽商科大学では、なぜ創立 100 年を記念した史誌が刊行できたのかを考えてみましょう。同大学では教員数名による小樽高商史研究会が組織され、その共同研究の成果として、2002 年に『小樽高商の人々』（小樽商科大学）が刊行されています⁸。そうした高商史の成果をまとめ得る前提に、創立 90 周年をかぞえる 2001 年に市内の市立小樽文学館との共催でそこを会場とした「小樽高商小樽商大 90 周年展」が開催されたことがあったのでしょう。小樽商科大学では、10 年後の創立 100 周年をみすえて 2000 年代初頭から準備をしていたわけです。この 10 年の努力と蓄積が、所蔵史料の整理と公開を促進し、大著の百年史の刊行を可能にしたのだとおもいます。同書の注目箇所は、通史編と学科史・資料編の 2 部構

⁸ 同書への書評がある [阿部 2004 b]。

成をとったなかで、前者のページ数の厩大さと、後者の編制の妙にあります。学内のカリキュラムや課程の変遷史にみえるかもしれない「学科史」とは、学内の諸相とってよい構成になっています。しかもその稿のいくつかを学外の研究者に執筆依頼したところも、稀有な、冴えのある試みだったとおもいます。旧帝大系の大学をべつとすると、こうした史誌の執筆を学外者に委ねるという例は、これまであまりなかったことでしょう。

高商をたんなる大学の前史にとどめなかった『小樽商科大学百年史』はこれからも、高商史の亀鑑として読まれてゆくとおもいます⁹。

また、学部史や大学史の編集刊行にかならずしもつながらなくても、いくつかの旧高商系学部で自校史教育の試みがみられます。ここでは和歌山大学経済学部の例をとりあげましょう¹⁰。同学部では 2014 年度に「教養の森授業」の 1 つに「21 世紀大学論」という名称の科目を開講し、その「授業のねらい・概要・科目の位置付け」を「和歌山大学および前身の諸校の歴史と伝統を多角的に概観し、現在と未来を見据えた視野を持って大学で学ぶことの意義を理解します。また大学の役割や機能、社会との関係性について考えます」と掲げています。この科目はまた「現在、和歌山大学が取り組んでいる「教養教育改革」の重点科目の一つ」だともいいます。和歌山大学は、師範学校を母体とする教育学部、高商を母体とする経済学部、新設学部のシステム工学部と観光学部の 4 学部からなります。授業内容には、各学部の教員がのべる「和歌山大学の歩み」や、教育学部と経済学部の「OB から見た和歌山大学」などがあります。「全学部・全学年」を受講対象として「人数制限：400 名」で企画した同授業は、初年度となる 2014 年度の受講生数は 60 名ほどだったといえます。当初予定の 15%とはいえ、およそ 60 名の受講生がいるとは、なかなかの関心度だとおもいます。

⁹ 同書編纂の前提となる小樽商科大学百年史資料室での業務を元に編まれた著書に [平井 2013] がある。貴重な成果ではあるが、本書には賛同できない点が多い。同書への批評を 2013 年 11 月 17 日開催「高等商業学校スタディーズ・ワークショップ」(滋賀大学彦根キャンパス) で報告した。

¹⁰ 2014 年 4 月 15 日に実施したヒアリングによる。機会を設けてくださった同大学附属図書館館長と司書スタッフに感謝もうしあげる。

和歌山大学ではこうした自校史教育を、「和歌山大学自校史等史料保存活用作業部会」の活動と連動しておこなっています。附属図書館、各学部、学生、卒業生が連携して、自校史の教育と史料の保存と活用を進めているところに使命への自覚があらわれているとおもいます。

大学史をめぐるのは、全国大学史資料協議会西日本部会による活動があります。昨年 2013 年には、その第 2 回研究会の会場に滋賀大学経済学部が選ばれました。会員校ではないにもかかわらず、会場となった本学部において彦根高商史を考えるときの論点や、高商史料などの閲覧機会を提供できたことは、なにより幸いでした¹¹。

史料 ではここまでみてきた高商史をめぐる環境の変化は、高商史を明らかにする史料をめぐるのはどのように展開したのでしょうか。国立大学の法人化ののちに、12 大学連絡会の解消や大学史編纂をめぐる二極化があらわれた一方で、高商刊行物の目録が少しずつ整えられてゆきました。彦根高商刊行物の初めてのまとまった目録は、2004 年にわたしが作成して公開しました [阿部 2004]。その目録に掲載された史料の多くも WEB 公開しています。

彦根を例にとれば、彦根高商創立からかぞえて 80 周年のときには、学部長主動によって、学部の附属史料館において、「滋賀大学経済学部創立 80 周年記念展「80 年の歩み—彦根高等商業学校から滋賀大学経済学部」」(2003 年 10 月 22 日～11 月 14 日)を開催しました(同展展示図録発行)。それから 10 年後の昨 2013 年には、学部としては企画展も要請しないし刊行物も発行しないという学部長の判断があったので、附属史料館とわたしたちの研究グループとの共催で、「滋賀大学経済学部創立 90 周年記念「彦根高商の日々—聞け黙々として語る史書(ふみ)」」(2013 年 10 月 21 日～11 月 23 日)を開催しました(同展展示図録発行)。

後者の展示においては、「一〇〇年前のグローバル・スペシャリスト養成」と「彦根高商

¹¹ このときの報告などについては、[阿部 2013 f] [阿部 2014] を参照(後者は講演会当日にレジュメとともに会場で配布した)。後者が掲載された『全国大学史資料協議会西日本部会会報』(30)には本学部を会場とした第 2 回研究会の参加記も掲載されている。

と戦争」というコーナーを設けたこと、あらためて彦根高商の教官の著書を総覧してその一部を展示したことを特徴としました。

旧植民地関係史料とは異なる高商史料——その刊行物や学校文書については、2000年代中葉からあらためて整備され、その公開が進みつつあります。

研究 では、高商史研究の展開はどうでしょうか。1つの劃期が[松重 2006]の発表にあるとわたしは考えています。松重は、教官の構成、その養成、その研究において、高商と帝大との類似や連携を指摘しながらも、調査という活動において（ひとまず中国調査を対象として）、高商の独自性をとなえています。いずれ大学に昇格すべく、あるいはその縮小版として研究と教育を遂行している高商というその像とは異なる、高商史研究の論点が提示されたといえます。こうした高商史の視角は、べつにいえば、高商と近現代日本を考える新動向に展開してゆくとみえます。

日本資本主義をささえ、企業勃興という時代における人材育成機関として高商を考える経済史、経営史、企業史という観点を盛り込んだ研究もあらわれています[三鍋 2011][長廣 2013]。ただこうした、ひとまず経済学系とよぼうとおもう研究動向には、1つの、小さくはない気がかりを感じます。それは、研究対象の史料がどうなっているのか、その説明がないところにあります。松重の研究は、幅広い高商史料の博搜をふまえ、そのようすを開示しながら持論が展開されています。それに対して、さきにあげた2例の経済学系高商史研究では、もとよりわたしたちの知らない史料が歴大にあげられ、それらが参照、引用されてはいるのですが、肝心の高商史料についての案内^{ガイド}に乏しく、いったい主題となっている高商生の「就職」について、どういう史料があるのかの開示に欠ける嫌いがあるとおもいました。

H.C.C. ■◇■（高商史研究の展望）¹²

ここで、わたしたちの調査と研究のようすを披露しましょう。わたしたちの研究グルー

¹² この部分にはすでに発表した[阿部 2013 f]と重なるところがある。

プでは、生徒を軸とした習学と履修の場として高商を考えるという観点を設けています。たんなる制度史でもなく、有名な、看板となるような教官や校長に特化させず、生徒を軸として高商史を考えようという構えです。このように構えたうえで、では調査と研究がどう進められたのかを、わたしの例にそくしてのべることにします。

海外修学旅行 1つは、高商生による海外修学旅行です。これは多くの高商で、その第1回入学生が3回生になったときから実施されている、1900年代初頭に始まる学校行事です。3回生の修学旅行は多くのばあい、1か月ちかくをかけた長期間にわたって、朝鮮半島、台湾、満洲をふくむ中国大陸、フィリピンなどをまわる大旅行となりました。

この海外修学旅行は、小樽や彦根では、卒業後の就職の場を在学中にあらかじめみておくという目的が掲げられていました。高商生の就職場として外地がどのくらい選ばれていたのか、その実相はまだよくわかっていません。ただおおまかなみとおしをのべておくと、高商生の時代にも転職があり、その転職がくりかえされるばあい、つぎへのステップアップをはかるときに、就職先としての外地が選ばれたようにおもいます。また、この旅行が実施されるには、外地の同窓会組織が動員されます。当時はすでにジャパン・ツーリスト・ビューローがあり、そうした旅行会社を利用しつつ、どこに泊まるか、どこで食事をするか、どこをみるか、まわるか、現地のだれに講演をたのむか、といったときに旅行先の現地にある同窓会組織の情報や人脈が活用されました。

高商の海外修学旅行を知ることは、高商生の就職先や同窓会組織の展開についても考えることとなります。

では、生徒たちはそれぞれの現地でみたこと体験したことをどのようにあらわしたでしょうか。高商の海外修学旅行では、戦跡めぐりがその1つの主要な旅程として組まれていました。日露戦争後のいまだ生々しい戦跡を見学して、兄や父の世代がまさに血と汗を流して戦った現場に立ったのです。また、1930年代、1940年代にもいくどかこの海外修学旅行が実施され、高商生たちは匪賊を排撃する軍隊に護られながら旅をしたこととなります。

生徒たちはまた、朝鮮半島への上陸時に、あるいは揚子江を遡航するときに、また満洲

の平原を鉄道で走るとき、「大陸」を感じとってゆきます。「大陸」をみた眼が、帰郷して日本にむかうとき、そこには狭く小さな日本がみえてしまいます。

高商の修学旅行は、1 つに、この戦跡と「大陸」を観点として論じることができるようにおもいます。

一方で、引率の教官たちは生徒の修学旅行が物見遊山に流れる嫌いがあると嘆じます。学校側は、修学旅行～生徒の調査と報告の能力と学内研究会での学習～卒業後の就職をうまく連動させようと試みたものの、そこがつながっているようで完全にそうはならなかったり、切断されているようでしかしなにかしらのつながりがみられたりするといったあやふやなようすが現出したようにとらえられます。それをわたしは「脱臼」と表現しました。

高商の海外修学旅行は、たとえば 2002 年に刊行された『小樽高商の人々』でもとりあげられていました。ただそこでは旅程をなぞるといったていどで、この研究はこれからの大きな開拓領域だとも思います。高商生の海外修学旅行は、いまから 100 年まえのグローバルイゼーション——それをわたしは *asianization* (アジアニゼイション、またはエイジャニゼイション) とよんでみました [阿部 2013 a] ——そうした場と展開を考える重要な素材になるとみとおしています。

夜学講習と女子教育 もう 1 つの高商史の新領域が、高商が実施した夜学講習です。これはたとえば、大分や神戸でも実施されていたことが知られていますが、それらの詳細を明らかにする史料はなかったようです。それがいまあらためて長崎高商の夜学講習を、その具体相において知ることのできる史料がでてきました。受講生の願書と教官の講義録がそれです。ただし、さてあらためてなぜ高商が夜学講習をおこなったのかについては、長崎高商にそくした文書はいまのところないようです。新聞報道では、「市民教育」の一環だとの記事はみえます。高商における夜学講習実施の要因や背景については今後の課題とするとして、生徒軸にして高商史を考えると、これまた格好の素材として夜学講習があります。

高商生とはだれか、と問うたとき、多くは 10 歳台後半の男子と答えるでしょう。ところ

が、いくつかの高商ではその年代よりもうえの世代の男性、そして少数とはいえ女性もまた夜学講習をとおして高商生となっていたのです。ただし夜学講習のいわば単位を取得して修了することは容易ではなく、修了生はごくかぎられた人数にとどまりました。修了すると同窓会組織である瓊林会の正式な会員にくわえられ、男性のばあい、それは職場での昇進に役だったようにうかがえます。長崎高商の夜学講習には、活水女子専門学校（現活水学院）の女子生徒たちもかよっていました。高商生が10歳台後半の男子にかぎられなかったという観点から高商をあらためて考えることによって、地域における高商の機能もまた、あらたな様相をあらわすでしょう。

さらなる観点 わたしたちの高商史研究グループ（仮称「高商スタディーズ」）では、ほかにいくつもの観点や論点を提示しています。語学教育、生徒の調査活動、外地の高商、商業デザイン、といった高商史の様相を明らかにしてゆくことで、高商をそのまるとおいて、文化という領野で考えることとなるでしょう。

高商は19世紀末から20世紀前期という世界史において、ヨーロッパやアメリカ合衆国、そして日本、東アジアで、十数年から数十年の幅をとりながらもほぼ同時期に展開していた同時代の事象といえるでしょう。スペイン語も学べた高商にとっての、あるいは高商が関与した地域は、ラテンアメリカにもひろがるでしょう¹³。個別にみても、ウラジオストクを視界におさめる小樽高商、満韓経営の人材育成をうたった山口高商、太平洋というひろがりを見わたした横浜高商、日本海をわが領分とした高岡高商といったそれぞれの地域を開拓しつつ、ひろく世界につながっていた高等教育機関が高商だったとおもいます。そこでの実学実践と教養主義をていねいにとらえてゆくことが、わたしたちの研究グループの課題です。

H.C.C. ■ ■ ◇（おわりに）

喫緊の課題 高商史研究をつぎへと進めようとするとき、わたしたちはいまなにをする

¹³ この点は同僚の坂野鉄也の教示による。

必要があるでしょうか。もっとも重要で緊急の作業は、高商史料の整備です。旧高商系学部それぞれに高商史料の保全状況が異なります。これは 1 つの高商をみても、高商というものを考えたことにはなりにくいという高商史研究の手法ともかかわってゆきます。いまひとまずそれをおくとしても、この学部ごとの違いは、それぞれの学部の史料をめぐる環境、史料についての考え、史料にかかわる人員とその陣容の差としてもあらわれています。それぞれに事情があるとはいえ、先進事例を参照しながら態勢を整えて史料を保全することが大切です。

とりわけ生徒執筆稿の確保が急がれます。小樽商科大学附属図書館、一橋大学附属図書館、滋賀大学経済経営研究所の作業と成果が、その先進事例となります。滋賀大学では彦根キャンパスにあった通称「旧書庫」の取り壊しにさいして、木製のりんご箱に入っていた彦根高商生執筆の卒業論文などが、2013 年の夏にあらためて見つかりました。翌年初めからその目録づくりを始め、およそ 2 週間弱の日数をかけて全体の 3 分の 2 くらいまでを収載した目録ができています。

他方で、本州に位置するある旧高商系学部では、おおよそ高商創立期からの生徒執筆稿が山積みの段ボール箱のなかで死蔵されたままとなっています。目録もありません。一時期は閲覧が許され、わたしひとりで少しずつその目録をつくり始めたのですがなかなか作業は進まず、いまはもはや閲覧もできないように聞いています。またべつのある旧高商系学部では、閲覧に提供する場所がない、史料が汚い、という理由で閲覧を許されなかったこともありました。とても残念なことです。閲覧を許可しないのであれば、せめて、なにが、どれだけあるのかを開示することは、史料所蔵者の責務であると強くおもいます。

共同研究の展開 高商史はゆたかな多様性に充ちています。それを十分に考えるためにも、さまざまな分野の研究者による、いくつもの観点を設けた共同研究が必要となります。わたしたちの研究グループは、そのための実働部隊でもあります。もっと人員と人材が欲しいところです（研究時間も）。

史料の記載や史料そのものの残りぐあいが一律ではないものの、生徒ひとりひとりにつ

いて、その履修科目、学内研究会への出席、紀要などへの寄稿、手稿原稿の有無、海外修学旅行への参加、卒業直後の就職情況、その後の転職情況などの情報を把握し、それを可能な限り高商生全体へとひろげてゆくと、どういった高商生像、高商像が描けるでしょうか。こうした厩大な情報を扱うには、人手が必要です。

ただし、生徒の情報を記した刊行物があって、それをデータベース化する予算と人員が確保できたとしても、情報入手できない事態もあります。そのときに史料所蔵機関が示す理由が、個人情報の保護という制約です。ではそのばあい、いわゆる個人情報保護法（「個人情報の保護に関する法律」2003年5月30日法律第57号）の条文をどう読むのか、理解するのでしょうか。同法第2条には、「この法律において「個人情報」とは、生存する個人に関する情報であつて」とあります。もちろん高商の在学時期によっては、いまもご健在の卒業生がおられます。

ある旧高商系学部では、史料の扱いをめぐる、この個人情報保護の観点による制約を課せられたことがあります。当該生徒が生存するのか物故したのか判明しない、また、それを探査する能力が当方にはないとのことでした。わたしはその探査も、（事務スタッフの仕事を増やすこととなりますが）、所蔵機関の責務であるとおもいます。あるいは、利用者に徹底した探査を指示し、その結果を待つて判断をすべきです。

高商刊行物は、その高商の在処にある公立の図書館に寄贈されたばあいがあります。ある県立図書館では、その県内にあった高商の同窓会名簿を、まったくの制約なしに閲覧も撮影も可としています。またある県立図書館では、そこが所蔵する高商同窓会の名簿に「指定書」のラベルを貼り、それを閲覧不可としていました。理由は個人情報保護法のさだめるところとのことでした。その法律は物故者にも適用されるのかと尋ねたところ、（だれがだれと協議して判断したのかは不明）、閲覧可となりました。

おうおうにして、この個人情報保護法の適用は、史料を所蔵する機関によって、また、その担当者によって、あるいはたまたまカウンターにいた職員によって、可否が異なるばあいがあります。それは利用者からすれば、おかしなことです。

H.C.C.

それはともかくも（と脇におけないことがらでもありますが）、高商史研究に共同研究というスタイルは不可欠ですし、とりわけ、旧高商系学部では高商史研究をもっと推進して欲しいとおもいます（学外者の利用を閉ざさずに）。

最後に、歴史を学ぶ、ということについてかんたんにふれます。わたしたちは（これはおそらく日本人などという枠に限定されないとおもいます）、歴史好きなのでしょう。歴史研究者が書く論文はそう読まれはしませんが（もちろんいくつかの例外はあります、ありました）、歴女などにみられる歴史好きや時代小説愛好家や歴史知識を教養として蓄えようとするひとはたしかにいます。歴史好きにとって、歴史を学ぶとはどういうことなのでしょう。わたしは歴史好きではないので、憶測にとどまるのですが、おそらく、歴史を学ぶとは、かつてあったことと同じことをする、また一方で、かつてあったことと同じことをしない、というための参照なのでしょう。単純に言えば、前者は成功を真似る、後者は失敗を避ける、ということです。

高商史を学ぶということは、21世紀初頭の現在、大学における、とりわけ地方国立大学法人における教育（とくに教養教育）を組みなおすときの参照例として活用されるのかもしれない。それは経営者の観点であり、彼らの仕事なのであって、わたしは違います。成功の模倣でも失敗の回避でもどちらでもなく、ともかく、過去をみる、歴史を参照するという姿勢の保持が必要だと考えます。性急に成果をもとめるのではなく、つねに、とまではゆかずとも、ともかくも、過去をみる、歴史を参照する姿勢を持ち続けることが大切です。その継続のなかで、史料を整備して、後世へと送り継いでゆくこと、これが望ましいと、わたしは考えています。

文献目録（参照順に掲載）

- 長崎高等商業学校編 1935 『長崎高等商業学校三十年史』長崎高等商業学校
長崎高等商業学校研究館編 1932 『資料目録』長崎高等商業学校研究館
横浜高等商業学校編 1943 『横浜高等商業学校二十年史』横浜高等商業学校

H.C.C.

- 山口高等商業学校編 1940 『山口高等商業学校沿革史』山口高等商業学校
- 大分高等商業学校編 1932 『大分高等商業学校十年史』大分高等商業学校
- 大分高等商業学校編 1942 『大分高等商業学校二十年史』大分高等商業学校
- 天野郁夫 1978 『旧制専門学校－近代化への役割を見直す』日本経済新聞社
- 1989 「近代日本高等教育研究」玉川大学出版部
- 1993 『旧制専門学校論』玉川大学出版部
- 滋賀大学史編纂委員会編 1989 『滋賀大学史』滋賀大学創立40周年記念事業実行委員会
- 1999 『滋賀大学史－五十周年を迎えて』滋賀大学創立50周年記念事業実行委員会
- 飯島渉 2001 「旧制横浜高等商業学校収集資料目録について」『横浜国立大学経済学部附属貿易文献資料センター所蔵旧制横浜高等商業学校収集資料目録』横浜国立大学附属貿易文献資料センター
- 横浜国立大学社会科学系部局八十年史編集委員会編 2008 『横浜国立大学社会科学系部局八十年史－経済学部・経営学部・国際社会科学研究科のあゆみ』横浜国立大学経済学部・経営学部・国際社会科学研究科
- 小樽高商史研究会編 2002 『小樽高商の人々』小樽商科大学
- 小樽商科大学百年史編纂室編 2011a 『小樽商科大学百年史』通史編、小樽商科大学出版会
- 2011b 『小樽商科大学百年史』学科史・資料編、小樽商科大学出版会
- 平井孝典 2013 『公文書管理と情報アクセス－国立大学法人小樽商科大学の「緑丘アーカイブズ」』世界思想社
- 滋賀大学経済学部附属史料館編 2013 『彦根高商の日々－聞け黙々として語る史書』2013年度企画展滋賀大学経済学部創立90周年記念、滋賀大学経済学部附属史料館
- 松重充浩 2006 「戦前・戦中期高等商業学校のアジア調査－中国調査を中心に」末廣昭

責任編集『岩波講座「帝国」日本の学知』第 6 巻

- 三鍋太朗 2011 「戦間期日本における官立高等商業学校卒業者の動向—企業への就職を中心に」『大阪大学経済学』61(3)
- 長廣利崇 2013 「戦間期日本における高等商業学校の就職斡旋活動」『大阪大学経済学』63(1)
- 青柳周一 2007 「「滋賀大学経済学部大学史関係史料」の保存と公開について」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』(40)
- 阿部安成 2004a 「〈史料紹介〉滋賀大学経済経営研究所調査資料室報⑧IX彦根高等商業学校の刊行物をたどる」『彦根論叢』(350)
- 2004b 「書評 小樽高商史研究会編『小樽高商の人々』」『彦根論叢』(350)
- 2006 「〈史料紹介〉滋賀大学経済経営研究所調査資料室報⑫XIII 同窓会からの贈りもの」『彦根論叢』(363)
- 2008 「大陸に興奮する修学旅行—山口高等商業学校生徒がゆく「満韓支」「鮮満支」」『中国 21』(29)
- 阿部ほか 2009 「アーカイブズの可能性を開く—地域、大学、行政」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.108
- 阿部安成 2011a 「小樽高商の海外修学旅行記録」前掲小樽商科大学百年史編纂室編 2011b 所収
- 2011b 「夜に学ぶ—20 世紀前期の長崎高等商業学校における 1 万 2036 人への実務者教育」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.144
- 2012 「講義録癩祭—長崎大学経済学部東南アジア研究所所蔵「長崎高等商業学校講義録」等目録」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.178
- 2013a 「蝶番としての海外修学旅行—20 世紀前期帝国日本と高等商業学校史研究の展望」『一橋大学附属図書館研究開発室年報』(1)
- 2013b 「高商生の泰安亜行～Bon voyage！—20 世紀前期高等商業学校が実施し

H.C.C.

た海外修学旅行の妙趣」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.177

2013c 「門前の小僧、筆を揮ふー長崎高等商業学校の卒業論文目録」滋賀大学
経済学部 Working Paper Series No.188

2013d 「おんあなたが学ぶ夜の場ー20世紀前期に開講した長崎高等商業学校の
夜学講習と受講者」『女性史学』(23)

2013e 「おんあなたの学舎、おとこたちの立身ー「長崎高等小学校の夜学講習」
考補遺」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.194

2013f 「母の痕跡ー歴史のなかの滋賀大学経済学部と彦根高等商業学校」滋賀
大学経済学部 Working Paper Series No.196

2014 「滋賀大学経済経営研究所の所蔵史料について」『全国大学史資料協議会
西日本部会会報』(30)

江竜美子 2004 「戦前期文献保存のワークショップの活動紹介」『アジア情報室通報』2(4)

菊地利奈 2008 「小樽高等商業学校における外国語教育ー高商英語教育が伊藤整の文学
活動に与えた影響」『滋賀大学経済学部研究年報』15

2011 「大正期の小樽高商における文学色ー小林象三、高浜年尾、伊藤整を中
心として」

坂野鉄也 2011 「旧制高等商業学校におけるスペイン語教育ー山口高等商業学校の事例」
滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.148

2012a 「高等商業学校とスペイン語教育」『小樽商科大学史紀要』(5)

2012b 「官立高等商業学校における「第二外国語」教育の変遷ー神戸高等商業
学校のばあい」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.167

2013a 「神戸高等商業学校におけるスペイン語教育の諸相」滋賀大学経済学部
Working Paper Series No.198

2013b 「戦前期高等商業学校における第二外国語教育ースペイン語を事例とし
て」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.204

- 杉岳志 2012 「高商生の調査報告」『小樽商科大学史紀要』(5)
- 2013 「東京高商の修学旅行とその報告書」『一橋大学附属図書館研究開発室年報』
(1)
- 横井香織 2002 「日本統治期の台湾における高等商業教育」『現代台湾研究』(23)
- 2007 「旧制高等商業学校生徒が見たアジアー台北高等商業学校の調査旅行を中心」『社会システム研究』15
- 西沢保 1987 「世紀転換期における高等商業教育運動をめぐってー飯田、関、福田の留学を中心」『経済学雑誌』88(1)